ニッポン ドクター和の 臨終図巻

(317) 「対馬丸」語り部、平良啓子

多くの犠牲の上に生きる私たち

78年目の敗戦の季節です。僕たちが子供だった頃は、今よりも学校現場で平和教育が盛んに行われていたように思います。僕の小中学校時代は、夏になると戦争の映画上映会があったり、被爆者の方を呼んで全校生徒でお話を聞いたりしたものです。その一環として、「対馬丸」についても本を読んだり映画を観たりした記憶があります。果たして今の子供たちは対馬丸の遭難について学校で教えてもらっているのでしょうか。

1944年7月、サイパンが陥落。これにより、米軍はサイパンからB―29爆撃機を出撃することが可能となり、日本全土への空襲がいつ行われてもおかしくない事態となりました。

日本政府は、沖縄県知事に、「本土決戦に備え、非戦闘員である老人、婦女、児童を本土または台湾へ疎開させよ」と通達を出します。

そして8月21日、疎開船の対馬丸は他の疎開船とともにおよそ1700人の民間人を乗せて那覇を出港し、長崎へと向かいました。幼い子供たちは、まるで修学旅行に出かけるかのようにはしゃいでいたという記録が残っています。「ヤマトに行ったら雪が見られる」と楽しみにしていた子もいたといいます。

しかしその翌日、対馬丸は悪石島沖合で米軍潜水艦からの魚雷攻撃を受けて沈没。乗員乗客合わせて約1500人が死亡。生き残った児童はたったの59人でした。

この生き残った児童のひとりで、戦後、自らの体験を語り続けた平良啓子さんが7月29日に亡くなりました。享年88。死因は、急性大動脈解離との発表です。

平良さんはこの8月にも講演会の予定が入っており、特に闘病をしていたわけではなかったようで、突然のお別れとなりました。

平良さんは「対馬丸」に、祖母や兄、いとこと同乗していました。しかし6日間の漂流の末、家族親族で無事生還できたのは、彼女だけだったそうです。奄美大島の漁師に救助されました。いとこの時子さんは目の前で流されていきました。漂流している間、子供たちの死体がどんどん寄ってきたといいます。9歳にして、平良さんは生き地獄を見たのです。

戦後しばらくの間は、「対馬丸のことは語るな」と箝口(かんこう)令が敷かれていたといいます。しかし平良さんは、この悲惨な出来事を語り継ぐことが生き残った者の使命と考え、現在まで、本の執筆や講演活動を続けてこられました。

「長いこと生きているのも生かされているのも、(亡くなった)子供たちが(語れ、語れ)と言うから、私は語らなくてはならないから、生きなければならない」

私たちは多くの命の犠牲の上に生きている。そのことを噛み締めて夏を過ごしたいと思います。

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長としてリビング・ウイルの啓発を行う。映画『痛くない死に方』『けったいな町医者』をはじめ出版や配信などさまざまなメディアで長年の町医者経験を活かした医療情報を発信する傍ら、ときどき音楽ライブも。